

## ミュンヘンの文学散歩（3）

佐野晴夫

### 15. 王宮

開発と整備に尽力した国王に因んで名前を付したマキシミリアン街からマックス・ジョーゼフ広場に戻り、東から北へ視線を転ずるとき、まず、ギリシャの神殿を思わす「国立劇場」、その左側奥に「王宮劇場」、さらに左前面に現在では「王宮博物館」「王宮宝物館」等として利用されている壮麗な宮殿の建物が見え、その美しさにかたずをのむ。いま、この順路で回り、見物してみよう。

近年、ますます盛名を高めているバイエルン州立歌劇団の本拠がおかれているのが、このミュンヘンの国立劇場(Nationaltheater, Max-Joseph-Platz)である。ミュンヘンにおける歌劇の歴史をひもとけば、数十メートル離れたサルバートル広場に、オペラ座が1651年にマルクス・シンナーグルによって建てられたが、老朽化したために、1795年には閉鎖された。まもなくオペラ座記念建設の機運が高まり、マックス1世は建築家カルル・フォン・フィッシャーに対してフランチェスコ派修道院の荒廃した跡地にパリの音楽堂に似せて建造するようにと下命した。1811年にルートヴィヒ皇太子が礎石を設置し、1818年に「王立宮廷国立劇場」が落成した。しかし5年後に火災で焼失してしまった。直ちに復興されることになり、建築の天才レオ・フォン・クレンツェはフィッシャーの古典主義的なプランを尊重し、ギリシャ神殿を模して玄関正面とした。この新しいオペラ座は1825年にこけら落としを行ったが、第2次世界大戦中の1943年に爆撃をうけて、再び崩壊した。再興にあたり、当時の金で6,300万マルクの巨費を投じて、1963年に現在のような新しい国立劇場が竣工された。この劇場の数本のコリント式円柱が支えるファサード上部には、ゲオルゲ・ブロイニンガー作「アポロと芸術神たち」が彩豊かに飾られ、印象的である。

劇場の中に入ると、ロビー・階段・貴賓室そして馬蹄形状に取り囲む観客席へ

と続く古典的な劇場様式を備えている。ドアを開けると、観客席がまばゆいシャンテリアのあかりと壁を装飾するランプの間接照明に照し出されている。観客席は、平土間席 (Parterre)・2階棧敷 (Balkon)・さらに3階席 (2. Rang) から6階席 (5. Rang) まで重層的に連なり、あでやかで晴れがましく、赤・白・金の色彩にとりまかれて浮かび上がる。たとえ天井棧敷であろうとも、とどく響きはすぐれた音質をもっている。むしろ舞台近くの左右後方の席のとき、上席であろうとも、視覚的に舞台全景を見ることが出来ないこともある。

この国立劇場では、世界有数のオペラ歌手や指揮者が登場し、余りにもすぐれた芸術性に感動し、アンコールの拍手が延々と続き、鳴りやまないことが多い。バイエルン歌劇団に対する州政府の補助金や地元の資産家の寄付金のせいで、北ドイツの人達が「バイエルン人は音楽と美術に資金を費やしすぎる」と呆れて語るほど、芸術活動の支援と援助を惜しまない。そのため、入場料金は低額でおさえられている。入場券を購入したい者は、劇場の東側裏の「バイエルン州立歌劇場入場券発売所」(Die Eintrittskartenskasse der Bayrischen Staatsoper, Maximilianstraße 111, Tel. 221316) において、1週間前より(日曜日のプログラムの場合は土曜日に)買うことができる。ウィークデイは10時より12時30分までと15時30分より17時30分まで発売している。上演作品によって料金表は異なるが、最も良い席で1万2千円位から学生用立見席で7百円位までである。発売窓口では、購入希望のプログラムと日付、そして展示されている座席表を見て、観覧したい階と座席番号を指示すればよい。評判の良いプログラムの場合、入場券を入手することが困難なこともあるが、大抵、当日開演直前であっても、国立劇場内南側のマキシミリアン街に面した夜間発売所 (Abendkasse) へ行けば、手に入る。たとえ完売されている場合でも、夜間切符売り場の脇に立っておれば、その日に都合が悪くなった人が入場券を買ってくれないか、と声をかけてくることが多い。無論、割り増し金を支払う必要はない。それどころか、交渉次第では割り引いてもらえる。参考までに、ある年の12月の上演プログラムを列挙してみよう。

1日チャイコフスキ作曲「エウゲニ・オネーギン」、2日ヴェルディ作曲「運命の力」(イタリア語)、3日「エウゲニ・オネーギン」、4日モーツァルト作曲「後宮よりの逃走」、5日バレーの夕べ、ラフマニノフ作曲「ラフマニノフの主題による変奏曲」ヒンデミット作曲「4つのテンペラメント」デュティロー作曲「2人」ハイドン作曲「ニ長調交響曲」、6日フンパーディング作曲「ヘンゼルとグレーテル」、7日午後ジャネット・ベーカー歌曲マチネー、夜「後宮よりの逃走」、8日第3回アカデミー・コンサート、9日「エウゲニ・オネーギン」、

10日マスカーニ作曲「カヴァレリア・ルスティカーナ」レオンカヴァルロ作曲「道化師」(イタリア語)、11日「運命の力」、12日モーツァルト作曲「フィガロの結婚」(イタリア語)、13日「ヘンゼルとグレーテル」、14日午後「ヘンゼルとグレーテル」、夜「エウゲニ・オネーギン」、15日ベートーヴェン作曲「フィデリオ」、16日ヘンデル作曲「マカベのユダ」、17日シュトラウス作曲「火の飢餓」18日シュトラウス作曲「ナクソス島のアリアドネ」、19日バレエの夕べ、20日ロッシニ作曲「ラ・チェネレントラ (シンデレラ)」(イタリア語)、21日ワグナー作曲「ローエングリーン」、22日チャイコフスキ作曲「胡桃割り人形」、23日「ラ・チェネレントラ」、24日休館、25日ワグナー作曲「トリスタンとイゾルデ」、26日「ラ・チェネレントラ」、27日プロコフィエフ作曲「ロメオとジュリエット」、28日プフィッツナー作曲「パレストリナ」、29日「胡桃割り人形」、30日午後「ヘンゼルとグレーテル」夜「同前」、31日午後「ヘンゼルとグレイテル」夜「ラ・チェネレントラ」

このプログラム表からうかがえるように、同一のものが再演されることは少なく、またオペラ愛好家にとって、国立劇場が大規模なホールだとすれば、ミュンヘン市内では、この外に王宮内の小ホール「旧王宮劇場」(別称、キュヴィリエ劇場、Altes Residenztheater <Cuvilliés-Theater>, 入口 Residenzstraße 1) や中ホール「ゲルトナー広場州立劇場」(Staatstheater am Gärtnerplatz, Gärtnerplatz 3)でも、連日開演しているので、殆ど毎日違うオペラを観ることができると言って、過言でない。

つぎに、隣接する「王宮劇場」(Residenztheater, Max-Joseph-Platz) で古典劇から最近話題の演劇まで観るのも楽しい。カルル・ホッホエーダーの設計で、1951年1月28日にこけら落としされた現代的な劇場である。オペラ座と異なる優雅で落ち着いた雰囲気の中で、州立俳優座の座員たちの迫真の演技とせりふとに引き込まれるように魅了されてしまう。やはり、ミュンヘンがヨーロッパ演劇の中心地の1つであることを痛感せざるをえない。ある年の12月では、ゲーテ作の「エグモント」「ファウスト第2部」、モリエール作「教養ある病人」、サルトル作「汚れた手」、ツックマイヤー作「ケーペニック大尉」、ストリンドベリイ作「父」、ゴンプロヴィツ作「ブルグンド王女イヴォンヌ」、シェイクスピア「リチャード3世」を連日上演していた。

さて、いよいよ中世末から1918年までヴィッテルスバッハ王家の居城であった建物に入ってみよう。既に歩いたホーフグラーベンに旧宮殿のあった14世紀には、ここはノイヴェステと呼ばれる砦に過ぎなかった。アルブレヒト5世、ヴィルヘ

ルム5世、マキシミアン1世、カルル・アルブレヒト王とマックス3世ヨーゼフ、ルートヴィヒ1世という歴代諸王たちの時代に増設が重ねられ、またバイエルン王国が消滅したあとでも、特に、第2次世界大戦後に、大々的な再建と増築が加えられてきた。広大な敷地に壮大な多面形の建物が連なり、とりわけ3つの代表的なファサード(正面玄関)と6つの中庭が人目をひいて止まない。「王宮」は、現在、「王宮博物館」(Residenzmuseum)「王宮宝物館」(Schatzkammer der Residenz, Max-Joseph-Platz 3)として、日曜日と金曜日が10時より13時まで、その他の曜日は10時より16時30分まで一般開放されている。また15歳以下の子供は大人の同伴者を必要としている。宮殿内部は、ルネッサンス期、ロココ期、古典期の宮廷建築様式の精髓が集められているが、祖先ギャラリー、骨董品室、戦争の間、19世紀陶器室、東アジア陶器室、動物室、選帝侯とシャロットの部屋、富貴の間、ニーベルンゲン広間といった箇所は、午前中しか見学を許していない。宝物館では、様々な王冠や装身具、10世紀の金細工、原石の持ち味をのこしたまま磨いてちりばめた宝石細工の数々が展示してある。この外に、国立エジプト美術収集館 (Staatliche Sammlung Ägyptischer Kunst) や国立貨幣収集館 (Staatliche Münzsammlung, 入口 Hofgartenstraße 1) もある。また城内の一角のクーヴェリエ劇場 (入口, Residenzstraße 1) でオペラを、さらにヘラクレス像の巨大な壁掛けを階段の間に飾っていることから「ヘラクレス広間」(Heraklessaal der Residenz, 入口 Hofgartenstraße) と呼ばれるところで催されるコンサートを日頃頻繁に聞くことができる。そして道を挟んだ北側には、市民の憩う宮廷公園が広がっている。

現在の王宮の利用のされ方は多面的である。レジデンツ街より、これらの博物館や音楽ホールのあるホーフガルテン通りへ曲がる角、つまり、オデオン広場に面するところにマックス・プランク研究所が入居しており、またその隣が葡萄酒レストラン「王宮プファルツ産葡萄酒試飲室」(Pfälzer Weinprobierstube in der Residenz, Residenzstraße 1) があり、その取り合せに目を見張ると同時に、なぜさほど多量に生産していないプファルツのワインがミュンヘンの、しかも王宮の建物内部で飲用できるのか、首をかきげたくなる場所である。だが、下記のようなヴィッテルスバッハ王家の歴史を知れば、肯首できるであろう。

## 16. バイエルン国王と詩人

ヴィッテルスバッハ王家の名称は、発祥地スイスに築いた一族の城にちなむのである。ミュンヘンに君臨した王家は12世紀のオットー1世に始まり、16世紀末

のヴィルヘルム5世まで大公を名乗り、次のマキシミリアン1世から18世紀末のカルル・テオドールまで選帝侯と称した。ヴィッテルスバッハ家は、1329年にバイエルン地方とプファルツ地方を領土とする両家に別れ、1777年にバイエルン王マックス3世ヨーゼフの崩御でもって旧バイエルン家系は途絶えたために、かってローマ神聖帝国皇帝となったバイエルン王ルートヴィヒ4世(1294-1347)から分枝したプファルツ・シュルツバッハ家系のカルル・テオドール王(1777-1799)がバイエルンとプファルツの両国を支配することになった。プファルツ・ツヴァイブリッテン家系に属する次代のマックス1世(1799-1825、1805年までのマックス4世ヨーゼフの改名)より国王を使用することになり、ルートヴィヒ1世(1825-1848) マックス2世(1848-1864) ルートヴィヒ2世(1864-1886)そして精神病のオットー1世(1886-1913)の代りに摂政宮ルイトポルト王(1886-1912)およびルートヴィヒ王(1912-1918、1913年以降ルートヴィヒ3世と改称)が統治してきたが、第一次世界大戦の敗北と共に王家は廃されることになった。

ところで、我々の関心は国王にはなく、詩人と文学運動にある。とは言え、ここでは、後ほど巡り歩くシュワービング地区の詩人たちの旧居やエピソードに言及する前に、芸術家の育成を喜びとした歴代の国王と詩人たちの関係をスケッチしておきたい。

今でこそ、ミュンヘンは130万人の住民を擁する大都会であるが、150年前はわずかに人口30万人にすぎないアルプス前山麓地の田園都市でしかなかった。その芸術好きな貴族や市民の気質から、ドイツのフィレンツェと呼称されたり、19世紀以降にわかに学術と技術の台頭をみせ、建築美に溢れた都市を形成していったことから、イーザル河畔のアテネとも例えられるようになった。それに連れて、次第に内外の芸術家や詩人を惹きつけてやまない都市へと変身して行った。

バイエルン国となる以前にも、啓蒙主義運動とともに活発な文筆業が活気をおび、その代表者がローレンツ・フォン・ヴェステンリーダーで、1782年にミュンヘンの最初の市誌を刊行した。勿論、近代詩人たちの中にもミュンヘンを訪ねる者いるが、定住する者は少なかった。1773年から翌年にかけてシュバルトが、1775年にレッシングが、1786年にゲーテが立ち寄っている。そして1789年に宮廷図書館が開放されている。バイエルン王国として、政治的に隆盛をむかえるにつれて、諸王は文化的にも学者や芸術家の育成と支援を図るようになった。とりわけ、それらのパトロンとなった3人の国王の名前を挙げるならば、ルートヴィヒ1世とマキシミリアン2世とルートヴィヒ2世がいる。

1800年頃になるとシェリングやゲーレスとその仲間がロマン主義にたいして重

要な寄与を果たし、ミュンヘンがドイツにおける文学運動の指導的役割を担うようになった。この南都を1820年にジャン・パウルが訪ねたり、またゲーテとシラーの作品の出版元であるシュッツガルトのコッタ社がハイネにたいしてミュンヘンで「政治年鑑」の編集を担当するように誘ったので、1827年から翌年までハイネは滞在した。イエズス会の保守的な牙城へ学術のアカデミーと市民的な博愛の平等主義の侵入が必要であり、詩人自らも大学教授への就任を願った。既に言及したように、ルートヴィヒ1世はその願いを叶えようとしたが、取り巻く僧侶や貴族の反対で、実現しなかった。陰謀をめぐる敵に取り巻かれていると感じるほど、カトリック復古主義の創設者イグナツ・テリンガー、体操の名人でゲルマニストだった国粋主義者マスマンやプラーテン伯爵たちがハイネの前に立ちふさがった。確かに、19世紀前半の都は、馬に鞭をふりながら作物を市場へ売にくる農夫たちやパイプたばこをくよらせながら斧を磨いている筏師で賑わっているにすぎず、精神的種子を蒔いても、まだ豊かに実らすことのできない荒れた土壌であった。そのような環境の中へ、1833年にアンデルセンが、1833年にブレンターノが、1836年にヘッベルが、1840年にケラーが希望を抱いて訪れ、失意のうちに去って行った。しかしながら、ルートヴィヒ1世は、ミュンヘンをドイツ随一の芸術都市へ高める意欲を捨てざらず、あらゆる分野の芸術家を惹きよせようと指図し、金銭よりも名誉で報いた。しかし、他国からやって来た一部の芸術家たちは、まるでオデッセーが漂着したパイエーケス島の何の愛いをもたないで奢侈逸楽にふける住民のように、カトリックの王城で気促に生きているような思いをした。宮殿を美人画で飾ったルートヴィヒ1世は、画家と共に、可愛らしいミュンヘン女性を愛した。そこでハイネは皮肉をこめて、次のように歌う程であった。

このかたがバイエルンのルートヴィヒ侯、	これに匹敵する人はいない。
バヴァリアの民衆がうやまうのは、	彼が血統正しい国王ゆえ。
このかたが愛すのは芸術と絶世の美女達	美女達の肖像画を写さす
この王はこの美人画で飾った宮殿内を	芸術のかん官として散歩する <sup>(26)</sup>

精神文化を高揚する学者や詩人は、やって来ると、素早く去って行ったが、国王が呼び寄せた画家、彫刻家、建築家たちは残り、次の時代の芸術を準備した。

ルートヴィヒ1世が退位を余儀なくされ、皇太子がマックス2世として即位したとき、英断をもって、支配的な僧侶階級や反動的な徒党集団が退けられ、「学者王」と呼ばれたごとく、新たに科学者や文化人や詩人が招聘された。つまり、一方で、歴史学者のジーベル、有機化学の創始者リービッヒ、他方で、ミュンヘン宮廷劇場・ワイマール宮廷劇場・ウィーンのブルク劇場の総監督にしてシェイク

スピアやヘッベルの戯曲の名演出で著名なディンゲルシュテット男爵を招いた。またリュベック出身の抒情詩人エマヌエル・ガイベル（1815-1884）を1852年の春にドイツ文学の名誉教授として招聘し、またガイベルの提案で24歳のベルリン児パウロ・ハイゼ（1830-1914）を呼び寄せた。マックス王は詩人たちに十分な年俵を与えたが、詩人たちはミュンヘンに居住し、「談話会」と称する精神的な円卓会議へ出席し、詩人たちは近作を朗読し、学者たちは講演し、そのあと美的ないし学術的な討論を行なう以外には何の義務もなかった。ハイゼは国王にメーリケとフォンターネを桂冠詩人にするように推挙したが、実現しなかった。

他郷の詩人を迎え入れる前に、ミュンヘンに、すでに文学協会があり、1848年に「ドイツ文芸協会」が生まれ、間もなく「年鑑」を発行した。国王に触発されて、フランツ・ヴォン・ポツツィ伯爵は多くのミュンヘン市民と共に「ミュンヘン・アルバム」を発行した。またメディクスを会長に「イーザル河畔詩人協会」も生まれていた。他方、他国者としてやって来たハイゼは、すぐさま新しい文学協会、つまり、「鱈」を創設しなければならないと考えた。サロン文学の絶盛時代のことであり、ハイゼと畏友ガイベルはロシア生まれのレーデブール夫人の自宅を文学サロンとして、「街角」と名付けた。その理由は、たまたま両詩人が街角に住んでいたからである。そのサロンで、美術史家ヴィルヘルム・リールが自分の著書から朗読したり、シャック画廊の創設者シャック伯がピアノを弾いたりした。また若年のハイゼがよく利用りする喫茶店「ミュンヘン亭」に、地元出身のハンス・ホプフェン（1835-1904）や外来の詩人であるガイベルを筆頭にハンプルク生まれのフェリクス・ダーン（1834-1912）、リングウ生まれのヘルマン・リング（1820-1905）、チューリッヒ近郊生まれのハインリヒ・ロイトホルト（1827-1879）、カルルスルーエ生まれのヨーゼフ・ヴィクトール・シェッフェル（1826-1886）、シュヴェーリン近郊生まれのアドルフ・フリードリヒ・シャック（1815-1894）たちが参集した。それは、ロマン派のリリズムに反対して凝った詩形を尊重したパリのグループ「パルナシアン」にも似た結社であった。この結社の名称は、ヘルマン・リングの詩「シンガポールの鱈」に因み、「鱈」と名付けられた。

シンガポールの聖池に	ものすごく気難しい性質の
老鱈がおり、	蓮の茎をかんでいる。
すっかり毫碌して全く目がみえない、	凍みる夜には
幼い子供のように泣くが、	晴れた日には、笑い声を上げる <sup>(27)</sup> 。

「鱈」の会員は、誰もがが爬虫類に基づく名称で呼ばれた。3匹の鱈の歌を詠んだガイベルが鱈親分ならば、シャックが鱈大先生で、ハイゼはとかげと呼ばれ

た。いわゆる「ミュンヘン派」と文学史上呼称される詩人たちは、1862年に「ミュンヘン詩人の書」を集めて発表した。ガイベルの指導のもとで、プラーテンの濃厚な影響を受けて、独創性に乏しいが、厳格な古典的形式に則った抒情詩ヘロマンティシユな情緒をこめ、超時代的な美を結実させようとした。

ガイベルの詩篇で、いまでも愛誦されている当時の作品は、「5月がやって来、樹木の芽いづる」の詩行で始まる「挿曲としての歌謡」第8におかれた4行6連詩である。日本では、彼の詩句は殆ど紹介されていないとはいえ、ゲルマニストの秋元蘆風が明治37年10月の雑誌「文庫」で「2つの胸にわかる時」また著書「独逸名詩評釈」（大2,3,精華書院）のなかで「4月に」を訳出している。

2つの胸にわかる時 (3節中の第1節) ガイベル

互(かたみ)に慕へる	2つの胸のわかるる時、
勝るもの無き	烈しきなやみ、
響く言の葉、いと悲しげに	『さらば、さらば、とこしへ』、と、
互に慕へる	2つの胸のわかるる時 <sup>(28)</sup> 。

この詩は『詩集』（1840）中の「挿曲としての新ソネット」へ収められた1篇である。詩人はリューベク女性アマング・ルイーゼ・トゥルンマー（愛称アダ）と結婚したばかりで、ミュンヘンへやって来、冬期は南独の首都で、夏期は北独の商都ですごした。しかし、幸福な結婚生活は長続きせず、多感な詩篇の中で愛称「アダ」で詠み込んだ新妻が1855年11月が死亡してしまった。また1864年にマキシミリアン国王の死後、バイエルンの宮廷から疎遠になり、1868年10月には郷里へ去った。

ハイゼもマルガレーテ・クグラールと結婚したばかりでミュンヘンへ来て、ガイベルを補佐しながらも、「ララビアータ」を含む不朽の「短編小説集」（1855）をはじめとする諸作品を残している。1862年に妻を亡くし、1867年にアンナ・シュバルトと再婚したが、翌年ガイベルと同様にバイエルンでの年金生活をやめた。ところで、ドイツに劣らず、日本でも沢山の人によってハイゼは愛読され、翻訳されて来た。在野のゲルマニストであった生田春月も「ララビアータ」を昭和4年の新潮社版「世界文学全集」第36巻で翻訳しているが、彼にとっては、それにもましてイタリア文学研究家としてのハイゼが重要な役割を果たした。ハイゼを通して憂愁の詩人レオパルディを識り、またミュンヘン大学教授でロマニストの泰斗カルル・フォスラーの「レオパルディ」等で研究する重大な契機をも与えた。

ハイゼよりも遥かにもっと重大な影響を黎明期の日本近代詩に与えたのは、シェフェルである。彼は、1852年、イタリア旅行中にローマでハイゼと友人となった



ことから、1854年から翌年にかけてミュンヘンの文学サークルに加わった。後にジャーナリストとして活動したが、プラーテンや古典派の感化をうけて、本来は、深い思想と自然へ強いきずなで結ばれていた。しかも自由の志操の持ち主で、また形式の完成と高度の技巧を駆使しながらも、同時に、彼の詩行には、とりとめもなく、独特なロマンティックな陰影を帯びていた。そのような詩風ゆえに、ベストセラーになっていた3百頁にのぼる彼の「ゼッキンゲンの喇叭手」(1854)の第125版を、当時ドイツ留学していた森鷗外が入手した。帰朝後に、その物語詩のうち「少年ヴェルナーの歌」「マルガレータの歌より」「5年後、イタリアから寄せられたヴェルナーの歌」の大意を歌人落合直文へ伝授して、「笛の音」と題する和言葉の〈韻〉訳で新体詩形へ移させ、森鷗外自らは〈意〉訳と称する五言律詩の漢詩体で、落合直文の「少年の巻・その五」と同一箇所を訳出し、「於母影」(明22.8)で発表している。両者の訳稿の相違を端的に味わってみよう。

笛の音 (少年の巻・その五・第2節)

別離 (3聯中第2聯)

落合 直文

森 鷗外

なれしふるさと出でしより  
 やつれはてたる旅ころも  
 よのうきことはしりてけん  
 ねたきころもかなしさも  
 嬉しきゆめをみてましを  
 きみがま玉手まくからに  
 わがよたのしくなりなむを  
 思えばはかなき世なりけり<sup>(29)</sup>

一自去郷国  
 飄蓬幾遷移  
 平生何所聞  
 妬忌與哀悲  
 玉腕如可枕  
 吾心安且夷  
 往事皈一夢  
 茫茫不可追<sup>(30)</sup>

森鷗外は、明治25年7月、「於母影」の訳詩に「青邱子」「盗俠行」を添えて付録とし、創作「うたかたの記」「舞姫」「文つかひ」等と共に、「水沫集」と題して上板した。小説「文つかひ」における叶わぬ恋や「舞姫」の主人公の異郷での相愛の恋人への別離の中に、愛するドイツ女性への森鷗外の恋情がパラレルに読み取れるのであるが、それにも増してシェッフェルの原詩によって、東還に際しての彼の慕情と思い断つ苦渋との相剋が、かき立てられた。そういう背景をもつ訳業でもあった。

さて、ここでルートヴィヒ2世へ話を移せば、前王のように学者や詩人をそれほど優遇することはなかった。繊細な感情の新王は、市民社会の現実とかけはなれ、中世の騎士道に憧れるような夢想家であった。リヒアルト・ワグナーのパトロンとして余りにも有名なエピソードを数々残しており、これに関しては、別の

ところへ譲ることにして、この国王の在位中に、この地で1865年に「トリスタンとイズルデ」、1868年に「ニュールンベルクの職匠歌人」、1869年に「ラインの黄金」、1870年に「ヴァレキューレ」、1878年に「ニーベルンゲンの指輪」が初演されたことだけを伝えておこう。

完

1992.4.7

## 註

- (26) 生田春月「ハイネ全集(2) 新詩集・ロマンツェロ」(既出) P. 335.
- (27) Hermann Linng: Das Krokodil zu Singapur.
- (28) 秋元蘆風「野葡萄」(明38.12、日高有倫堂) P. 33.
- (29) 森鷗外「水沫集」(明39.5、大7.7、春陽堂) P.883-884.
- (30) Ibid. P.902.